



鹿児島県から得られた国内における分布の南限記録となるタテガミギンボ

望月健太郎¹・樋之口蓉子²・本村浩之³

Author & Article Info

¹ 鹿児島大学大学院農林水産学研究所 (鹿児島市)
k3545896@kadai.jp

² 特定非営利活動法人くすの木自然館 (始良市)
hinokuchi@kusunokishizenkan.com

³ 鹿児島大学総合研究博物館 (鹿児島市)
motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp (corresponding author)

Received 03 October 2021

Revised 04 October 2021

Accepted 04 October 2021

Published 05 October 2021

DOI 10.34583/ichthy.13.0_4

Kentaro Mochizuki, Yoko Hinokuchi and Hiroyuki Motomura. 2021. Southernmost Japanese records of *Scartella emarginata* (Blenniidae) from Kagoshima Prefecture, southern Japan. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 13: 4–8.

Abstract

Twenty-three specimens (33.1–59.8 mm standard length) of *Scartella emarginata* (Günther, 1861) were collected from off Kasasa (west coast of Satsuma Peninsula) and off Aira (Kagoshima Bay), Kagoshima Prefecture, Japan. In Japanese waters, *S. emarginata* has previously been recorded from the Sea of Japan coast from Yamaguchi Prefecture and the Pacific coast from Kanagawa to Miyazaki Prefecture. Thus, the present specimens, herein described in detail, represent the first records from Kagoshima Prefecture as well as southernmost and westernmost Japanese records for the species. Because the present Aira specimens were collected from a large fish pen farming *Pagrus major* (Sparidae) originally from Ehime Prefecture, the former were most likely to be introduced from Ehime Prefecture with juveniles of *P. major*.

イソギンボ科タテガミギンボ属 (Blenniidae: *Scartella*) は頭部正中線に総状の皮弁が並ぶこと、鋤骨に歯をもたないこと、および鰓孔が大きく、左右の鰓膜は峡部を横断して連続することによって特徴づけられる (Bath, 1977). 本属魚類は世界から 7 有効種が知られており (Bath, 1977, 1990; Rangel et al., 2004; Rangel and Mendes, 2009), 日本を含むインド・西太平洋にはタテガミギンボ *Scartella emarginata* (Günther, 1861) のみが分布する (Shen et al., 1986; Krishnan and Mishra, 1993; Cha and Park, 1994; Randall,

1995; Sadovy and Cornish, 2000; Wood et al., 2000; Manilo and Bogorodsky, 2003; Kim and Endo, 2009; 藍澤・土居内, 2013; Attaran-Fariman et al., 2016; Mehraban and Esmaceli, 2018; Araujo et al., 2019; Zajonz et al., 2019; 本村, 2020).

2010 年 3 月 13 日に薩摩半島西岸に位置する笠沙町から 1 個体, 2021 年 8 月 16 日に鹿児島湾奥の始良市沖から 22 個体のタテガミギンボが採集された。これらの標本は本種の国内における南限および西限記録であるとともに鹿児島県初記録となるため, ここに報告する。なお, 始良市沖から得られた個体の由来について考察した。

材料と方法

標本の計数・計測方法は Shen et al. (1986) と Kim and Endo (2009) にしたがった。標準体長 (standard length) は体長または SL と表記した。体各部の計測はデジタルノギスを用いて 0.1 mm 単位まで行い, 計測値は体長に対する百分率で示した。生鮮時の色彩は固定前に撮影された標本のカラー写真に基づく。標本の作製, 登録, 撮影, および固定方法は本村 (2009) に準拠した。本報告に用いた標本は鹿児島大学総合研究博物館 (KAUM) に保管されており, 上記の生鮮時の写真は同館のデータベースに登録されている。

Scartella emarginata (Günther, 1861)

タテガミギンボ

(Fig. 1; Table 1)

標本 KAUM-I. 30455, 体長 44.5 mm, 鹿児島県南さつま市笠沙町片浦高崎山地先 (31°26'00"N, 130°10'05"E), 水深 36 m, 2010 年 3 月 13 日, 定置網, 中畑勝見; KAUM-I. 160672, 体長 51.9 mm, KAUM-I. 160673, 体長 43.4 mm, KAUM-I. 160674, 体長 49.8 mm, KAUM-I. 160675, 体長 52.9 mm, KAUM-I. 160676, 体長 48.6 mm, KAUM-I. 160677, 体長 51.7 mm, KAUM-I. 160678, 体長 53.8 mm, KAUM-I. 160679, 体長 43.8 mm, KAUM-I. 160680, 体

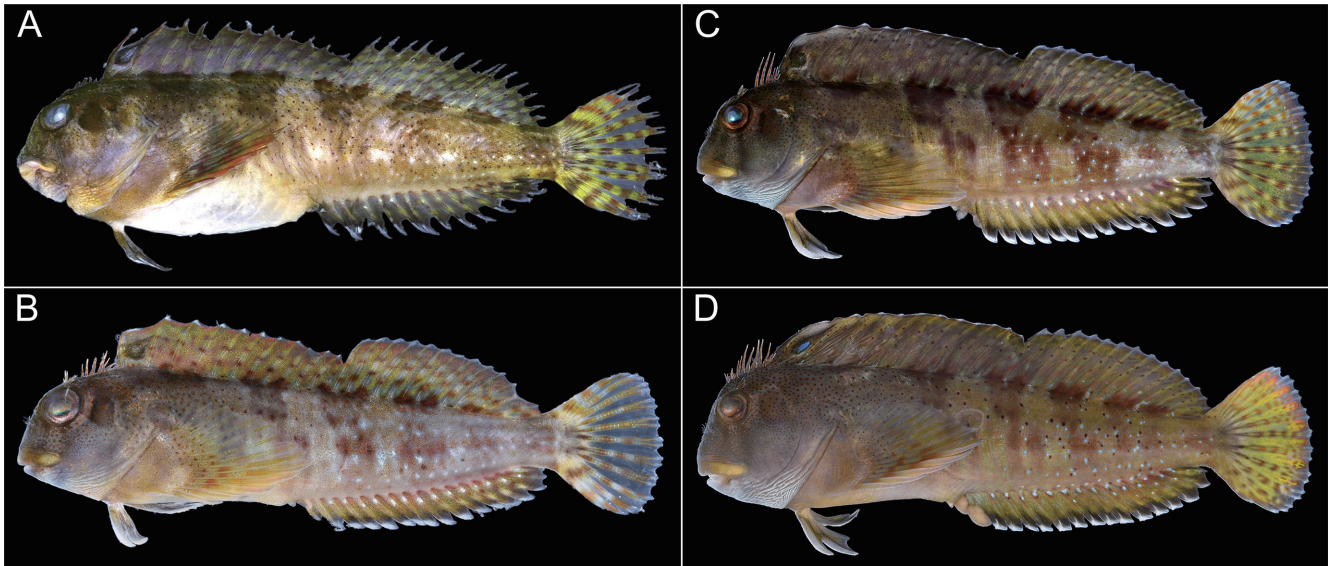


Fig. 1. Fresh specimens of *Scartella emarginata* from Kagoshima Prefecture, southern Japan: (A) off Kasasa, west coast of Satsuma Peninsula, and (B–D) off Aira, Kagoshima Bay. A: KAUM-I. 30455, 44.5 mm SL; B: KAUM-I. 160693, 33.1 mm SL; C: KAUM-I. 160676, 48.6 mm SL; D: KAUM-I. 160683, 53.9 mm SL.

長 47.4 mm, KAUM-I. 160681, 体長 59.8 mm, KAUM-I. 160682, 体長 44.9 mm, KAUM-I. 160683, 体長 53.9 mm, KAUM-I. 160684, 体長 50.6 mm, KAUM-I. 160685, 体長 51.4 mm, KAUM-I. 160686, 体長 48.8 mm, KAUM-I. 160687, 体長 49.6 mm, KAUM-I. 160688, 体長 42.3 mm, KAUM-I. 160689, 体長 41.7 mm, KAUM-I. 160690, 体長 37.8 mm, KAUM-I. 160691, 体長 42.7 mm, KAUM-I. 160692, 体長 47.2 mm, KAUM-I. 160693, 体長 33.1 mm, 鹿児島県始良市脇本白浜約 300 m 沖 (31°41'00"N, 130°36'49"E) に設置された生簀網, 水深 10 m, 2021 年 8 月 16 日, 清掃のため生簀網を水揚げした際に徒手採集, 梶 健一.

記載 計数形質と体各部の体長に対する割合を Table 1 に示した. 体は前後方向に伸長する. 体背縁は吻から眼上部にかけて急激に上昇し, そこから背鰭起部から第 6 背鰭棘条基部にかけて緩やかに上昇し, そこから尾柄部にかけて緩やかに下降する. 体腹縁は下顎先端から肛門にかけて緩やかに下降し, そこから尾柄部にかけて緩やかに上昇する. 口は垂端位で, 上顎後端は瞳孔下方に位置する. 前鼻孔は円形で, 眼の下縁の前方に開口する. 鼻皮弁は房状. 後鼻孔は楕円形で, 目の前方に開口する. 眼上皮弁は房状. 瞳孔上方から背鰭起部にかけての頭部正中線に総状の皮弁が 1 列に並ぶ. 両顎に扁平な切歯状歯が並び, 後端に 1–2 本の円錐状歯をもつ. 上顎歯の基部は前上顎骨, 下顎歯の基部は歯骨にそれぞれ癒合する. 鋤骨と口蓋骨に歯がない. 鰓孔は大きく, 鰓膜は峽部を横断して連続する. 背鰭起部は腹鰭基部上方に位置し, 背鰭棘条部はそこから臀鰭起部上方のやや後方まで伸び, 背鰭軟条部はそこから尾鰭基部下端直前まで伸びる. 背鰭棘条は背鰭軟条より全体的に短く, 背鰭最終棘条は最も短くなり, 背鰭棘条部と軟条部の

間に切り込みをもつ. 臀鰭起部は肛門直後に位置し, 臀鰭基底後端は尾鰭基部下端直前に達する. 成熟したオスの個体は臀鰭棘条が竜骨状突起により覆われる (Fig. 1C, D). 背鰭と臀鰭の最終軟条は鰭膜で尾柄と癒合する. 胸鰭基底上端は鰓蓋後端の直後に位置する. 胸鰭後端は肛門上方に位置する. 腹鰭起部は腹面の鰓孔の直後に位置する. 尾鰭は截形. 体表は無鱗. 側線管は鰓蓋上端から背鰭最終棘条下方まで伸びる.

色彩 生鮮時の色彩 (Fig. 1) — 吻端から胸鰭基部前方にかけての背面は暗褐色を呈し, 小さい赤褐色の斑紋が密に分布する. 下顎先端から鰓蓋後端までの腹面は灰色を呈する. 腹鰭基部から肛門までの腹面は白色を呈するが, 大型の個体では黄土色を呈する (Fig. 1D). 肛門上方から尾部までは一様に茶褐色を呈し, 小さい黒色斑と淡い水色の斑が分布するが, その数は個体によって変異がある. 胸鰭基部から尾柄部にかけて 6 本の不明瞭な暗褐色の縦帯が背鰭基部から腹面方向に伸びるが, 腹面まで達しない. 上顎は黄土色. 眼下部に 2 本の暗褐色帯があり, 一方は上顎の中間部まで伸び, もう一方は上顎後方末端まで伸びる. 眼後部に眼径よりも大きい暗褐色斑がある. 眼上部と後頭部の皮弁は赤色と黒色を縞状に呈する. 背鰭鰭条は黄土色と赤褐色を縞状に呈する. 背鰭棘条部の基膜は一様に茶褐色を呈するが, 大型の個体では一様に暗い茶褐色を呈する (Fig. 1D). ほとんどの個体で背鰭第 1 棘条と背鰭第 2 棘条の基膜間に外側は暗褐色, 内側は青色を呈する大きな眼状斑をもつ (Fig. 1A, C, D), 一部の個体では同斑の内側の青色がなくなり, 斑が一様に暗褐色を呈する (Fig. 1B). 背鰭軟条部の基膜は一様に黄土色を呈する. 臀鰭は一様に黄土色を呈し, 末端付近では暗褐色を呈し, 最も末端の部分では白色を呈する. 臀鰭鰭条に沿って淡い水色の斑が不

連続に分布する。胸鰭の上方部は淡い黄土色を呈し、下方部では黄土色と赤褐色を呈する。腹鰭は基底付近では黄土色を呈し、末端に進むにつれて灰色を呈する。尾鰭鰭条は黄土色と赤褐色を縞状に呈し、基膜は淡い黄土色を呈する。

分布 朝鮮半島, 日本, 台湾, および中国にかけての西太平洋とインド, パキスタン, イラン, オマーン, イエメン, モザンビークおよび南アフリカにかけてのインド洋に分布する (Shen et al., 1986; Krishnan and Mishra, 1993; Cha and Park, 1994; Randall, 1995; Sadovy and Cornish, 2000; Wood et al., 2000; Manilo and Bogorodsky, 2003; Kim and Endo, 2009; 藍澤・土居内, 2013; Attaran-Fariman et al., 2016; Mehraban and Esmacili, 2018; Araujo et al., 2019; Zajonz et al., 2019; 本村, 2020)。国内においては山口県 (日本海沿岸), 神奈川県 (横浜・三浦半島), 静岡県 (瓜島・淡島・内浦湾・大瀬崎・三保・静波・御前崎), 和歌山県 (みなべ・田辺・白浜), 高知県 (室戸・以布利・栢島), 愛媛県 (室手・宇和島) および宮崎県 (門川湾) から記録されていたが (Kamohara, 1955, 1964; Fukao, 1985; 内田ほか, 1998; 永友, 2001; 水野ほか, 2002; 工藤・山田, 2003; 平田ほか, 2010; 工藤, 2011; 藍澤・土居内, 2013; 池田・中坊,

2015; 三木, 2019, 2021), 本研究によって新たに鹿児島湾の始良市沖と薩摩半島南西岸の笠沙町から本種が記録された。

備考 鹿児島県産の標本は, 背鰭軟条数が 13–15 であること, 腹鰭軟条数が I, 3 であること, 尾鰭分枝軟条数が 8–10 であること, 頭部正中線に縷状の皮弁が一行に並ぶこと, 上顎に犬歯状歯がないこと, 上顎歯の基部と前上顎骨が癒合すること, 鋤骨に歯をもたないこと, 鰓孔は大きく, 左右の鰓膜は峽部を横断して連続すること, 背鰭棘条部と軟条部の間に切り込みをもつこと, および体側面に黒色斑をもつなどの特徴が Shen et al. (1986) や 藍澤・土居内 (2013) の示したタテガミギンポ *S. emarginata* の特徴とよく一致したため, 本種に同定された。

タテガミギンポに適用される学名は従来 *Blennius cristatus* とされていたが (Kamohara, 1964), Bath (1977) は本種を *Scartella* に変属し, 以後タテガミギンポの学名は *Scartella cristata* が適用されていた (吉野, 1984; Fukao, 1985; 藍澤, 1997)。Shen et al. (1986) は台湾から得られた本属魚類を *S. cristata* と比較して体側面に多くの黒色点をもつことから *S. emarginata* と同定した。藍澤 (1993, 2000)

Table 1. Counts and proportional measurements, expressed as percentages of standard length, of specimens of *Scartella emarginata* from Kagoshima Prefecture, Japan.

	Satsuma Peninsula	Kagoshima Bay	
	KAUM-I. 30455	n = 22	
Standard length (SL; mm)	44.5	33.1–59.8	
Counts			Modes
Dorsal-fin rays	XVII, 14	XVII, 13–15	XVII, 14
Anal-fin rays	II, 16	II, 13–17	II, 16
Pectoral-fin rays	14	13–14	14
Pelvic-fin rays	I, 3	I, 3	I, 3
Branched caudal-fin rays	9	8–10	9
Upper-jaw teeth	29	27–33	29
Lower-jaw teeth	29	27–34	30
Measurements (% of SL)			Means
Head length	27.3	27.8–31.2	29.2
Body depth	27.6	22.4–28.9	25.1
Head width	17.4	17.9–20.7	19.3
Snout length	9.1	9.7–11.6	10.7
Orbit diameter	6.6	6.2–8.0	7.2
Interorbital width	4.2	2.6–3.7	3.2
Upper-jaw length	9.2	10.2–11.8	10.9
Pre-dorsal-fin length	22.8	20.6–25.8	23.6
Pre-anal-fin length	54.4	47.5–55.7	51.3
Pre-pectoral-fin length	26.4	27.5–31.4	28.8
Pre-pelvic-fin length	20.9	17.5–22.4	19.4
Dorsal-fin base length	81.6	79.9–86.2	82.7
Anal-fin base length	38.1	39.0–49.4	44.9
Longest dorsal-fin spine length	12.4	11.1–16.4	13.2
Longest dorsal-fin ray length	14.9	13.1–15.6	14.3
Longest anal-fin ray length	12.5	10.7–12.8	11.9
Pectoral-fin length	25.7	21.5–29.0	25.9
Pelvic-fin length	18.7	15.1–19.4	17.1
Caudal-fin length	20.1	17.3–20.5	18.8
Caudal-peduncle length	10.0	6.4–9.3	7.8
Caudal-peduncle depth	9.5	8.7–10.7	9.7

や藍澤・土居内 (2013) は Shen et al. (1986) の示した特徴に基づき、これまで国内で記録されていた *S. cristata* は *S. emarginata* であるとし、タテガミギンポには後者の学名が適用されるものとした。しかし、本研究で観察した標本は韓国で記録された標本と同様に上顎に円錐状歯をもつものに対し (Kim and Endo, 2009), *S. emarginata* の原記載では上顎に円錐状歯をもたないとされている (Günther, 1861)。また生鮮時の色彩についても、Shen et al. (1986), Kim and Endo (2009), および本研究で用いられた東アジア産の標本は体色が一樣に茶褐色を呈し、背鰭第 1 棘条と背鰭第 2 棘条の基膜間に 1 つの大きな暗色斑をもつものに対し、タイプ産地であるアラビア海産の標本は体色が一樣に白色を呈し、背鰭に大きな斑紋がない (Randall, 1995)。本研究では Shen et al. (1986) と藍澤・土居内 (2013) の示した特徴に基づき *S. emarginata* と同定したが、今後より広域の標本に基づいた検討が必要である。

始良市沖から得られた標本はすべてマダイ養殖いけすの牡蠣殻が大量に付着した網 (目合 5 cm) に生息しており、いけすの牡蠣殻除去清掃のため網が陸に引き上げられた際に採集された。上記のいけすで飼育されていたマダイ種苗はタテガミギンポの生息が確認されている愛媛県 (水野ほか, 2002; 平田ほか, 2010; 藍澤・土居内, 2013) から導入された (梶 健一氏, 私信)。また、これまで鹿児島湾を対象に魚類相を調査した今井・中原 (1969), 岩坪・本村 (2017), 中村ほか (2019), および中川ほか (2021) ではタテガミギンポの記録はない。以上のことから始良市沖から得られた標本はマダイ種苗に混入して愛媛県から持ち込まれた可能性が示唆された。本研究では本種の仔稚魚および卵をもつ個体は確認されなかったが、オスの二次性徴形質と考えられる臀鰭棘条が竜骨状突起により覆われた標本 (KAUM-I. 160672, 体長 51.9 mm; KAUM-I. 160675, 体長 52.9 mm; KAUM-I. 160676, 体長 48.6 mm; KAUM-I. 160678, 体長 53.8 mm; KAUM-I. 160680, 体長 47.4 mm; KAUM-I. 160681, 体長 59.8 mm; KAUM-I. 160683, 体長 53.9 mm; KAUM-I. 160684, 体長 50.6 mm; KAUM-I. 160687, 体長 49.6 mm; Fig. 1C, D) が得られた。本種が鹿児島湾において再生産しているか不明であることから、今後も同水域における継続的な調査が望まれる。一方、薩摩半島西岸の笠沙町沖から採集された 1 個体 (KAUM-I. 30455, 体長 44.5 mm) は自然分布と思われるが、薩摩半島沖の南下流によって九州北西部から偶来した可能性が高く、個体数も少ないことから、同所で再生産している可能性は低い。

謝 辞

本報告を取りまとめるにあたり、鹿児島大学総合研究博物館魚類分類学研究室の学生とボランティアのみなさま

には、標本の作製および登録作業においてご協力いただいた。同研究室の中川龍一氏と高知大学理工学部海洋生物学研究室の井上裕太氏には文献の収集にご協力いただいた。鹿児島県漁業協同組合錦海支所運営委員長の梶 健一氏には採集個体の提供と種苗の由来に関する情報をいただいた。Ichthy 編集委員の松沼瑞樹氏には本稿に対して適切な助言をいただいた。以上の方々に謹んで感謝の意を表す。本研究は鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島・琉球列島の魚類多様性調査プロジェクト」の一環として行われた。本研究の一部は公益財団法人日本海事科学振興財団「海の学びミュージアムサポート」、JSPS 科研費 (20H03311・21H03651), JSPS 研究拠点形成事業—B アジア・アフリカ学術基盤形成型 (CREPSUM JPJSCCB20200009), および文部科学省機能強化費「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点形成」の援助を受けた。

引用文献

- 藍澤正宏. 1993. イソギンポ科, pp. 952–980, 1352–1353. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 東海大学出版会, 東京.
- 藍澤正宏. 1997. イソギンポ科, pp. 562–571. 岡村 収・尼岡邦夫 (編) 日本の海水魚. 山と溪谷社, 東京.
- 藍澤正宏. 2000. イソギンポ科, pp. 1090–1119, 1601–1603. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第 2 版. 東海大学出版会, 東京.
- 藍澤正宏・土居内龍. 2013. イソギンポ科, pp. 1295–1324, 2101–2105. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第 3 版. 東海大学出版会, 秦野.
- Araujo, G. S., A. Vilasboa, M. R. Britto, G. Bernardi, S. V. D. Heyden, A. Levy and S. R. Floeter. 2019. Phylogeny of the comb-tooth blenny genus *Scartella* (Blenniiformes: Blenniidae) reveals several cryptic lineages and a trans-Atlantic relationship. *Zoological Journal of the Linnean Society*, 190: 54–64. [URL](#)
- Attaran-Fariman, G., S. Estekani and J. Ghasemzadeh. 2016. The first study of the phylogenetic relationships of three rare species of blenniids (Fishes: Blenniidae) from Makoran coast based on the gene sequencing of Cytochrome Oxidase 1. *Iranian Scientific Fisheries Journal*, 25: 135–148. [URL](#)
- Bath, H. 1977. Revision der Blenniini (Pisces: Blenniidae). *Senckenbergiana Biologica*, 57: 167–234.
- Bath, H. 1990. Über eine neue art der gattung *Scartella* von den Kapverdischen Inseln (Pisces: Blenniidae). *Mitteilungen der Pollichia*, 77: 395–407. [URL](#)
- Cha, S.-S. and K.-J. Park. 1994. Distribution of the ichthyoplankton in Kwangyang Bay. *Korean Journal of Ichthyology*, 6: 60–70. [URL](#)
- Fukao, R. 1985. An annotated list of blennioid fishes from Shirahama, Wakayama Prefecture, Japan. *Publications of the Seto Marine Biological Laboratory*, 30: 81–124. [URL](#)
- Günther, A. 1861. Catalogue of the acanthopterygian fishes in the collection of the British Museum. Vol 3. Gobiidae, Discoboli, Pediculati, Blenniidae, Labyrinthici, Mugilidae, Notacanthi. *British Museum, London*. xxv + 586 pp. [URL](#)
- 平田智法・高木基裕・平田しおり. 2010. 生態編, pp. 14–171. 高木基裕・平田智法・平田しおり・中田 親 (編) えひめ愛南お魚図鑑. 創風社出版, 松山.
- 池田博美・中坊徹次. 2015. 南日本太平洋沿岸の魚類. 東海大学出版部, 秦野. xxii + 597 pp.
- 今井貞彦・中原官太郎. 1969. 錦江湾海中公園候補地の魚類相, pp. 51–82. 鹿児島大学水産学部 (編) 霧島・屋久国立公園錦江湾海中公園調査書. 鹿児島県, 鹿児島.

- 岩坪洗樹・本村浩之. 2017. 火山を望む甕海 鹿児島湾の魚類. 鹿児島水圏生物博物館, 鹿児島・鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 302 pp.
- Kamohara, T. 1955. On some rare species of fishes from Prov. Tosa, Japan. Reports of the Usa Maine Biological Station, 2 (2): 1–4.
- Kamohara, T. 1964. Revised catalogue of fishes of Kochi Prefecture, Japan. Reports of the Usa Marine Biological Station, 11: 1–99.
- Kim, B.-J. and H. Endo. 2009. First reliable record of the maned blenny *Scartella emarginata* (Perciformes: Blenniidae) from Jeju Island, Korea. Korean Journal of Ichthyology, 21: 125–128. [URL](#)
- Krishnan, S. and S. S. Mishra. 1993. On a collection of fish from Kakinada–Gopalpur sector of the east coast of India. Records of the Zoological Survey of India, 93: 201–240. [URL](#)
- 工藤考浩. 2011. 横浜, 川崎および中の瀬海域から初記録の魚類—V. 神奈川自然誌資料, 32: 127–133. [URL](#)
- 工藤考浩・山田和彦. 2003. 三浦半島南西部沿岸の魚類—V. 神奈川自然誌資料, 24: 49–54. [URL](#)
- Manilo, L. G. and S. V. Bogorodsky. 2003. Taxonomic composition, diversity and distribution of coastal fishes of the Arabian Sea. Journal of Ichthyology, 43: S75–S149.
- Mehraban, H. and H. R. Esmacili. 2018. Comb-tooth blennies of the intertidal zones of Persian Gulf and Makran Sea: morphology, taxonomy, distribution and conservation status (Blenniiformes: Blenniidae). Iranian Journal of Ichthyology, 5: 192–211. [URL](#)
- 三木涼平. 2019. タテガミギンポ, pp. 154–155. 村瀬敦宣・三木涼平・和田正昭・瀬能 宏 (編) 宮崎県の魚のまち 門川の魚図鑑. 宮崎大学農学部附属フィールド科学教育研究センター延岡フィールド, 延岡.
- 三木涼平. 2021. タテガミギンポ, pp. 194–195. 村瀬敦宣・緒方悠輝也・山崎裕太・三木涼平・和田正昭・瀬能 宏 (編) 新・門川の魚図鑑 ひむかの海の魚たち. 宮崎大学農学部附属フィールド科学教育研究センター延岡フィールド, 延岡.
- 水野晃秀・木熊慶吾・福本運大. 2002. 愛媛県宇和島市坂下津地先の魚類目録. 南予生物, 12: 10–26. [URL](#)
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp. [URL](#)
- 本村浩之. 2020. 日本産魚類全種目録. これまでに記録された日本産魚類全種の現在の標準和名と学名. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 560 pp. [URL](#)
- 永友 繁. 2001. タテガミギンポ, p. 244. 中坊徹次・町田吉彦・山岡耕作・西田清徳 (編) 以布利 黒潮の魚. 海遊館, 大阪.
- 中川龍一・樋之口蓉子・Kunto Wibowo・ジョン ビョル・和田英敏・藤原恭司・荒木萌里・望月健太郎・飯野友香・石原祥太郎・小川奈津・出羽優風・本村浩之. 2021. 鹿児島湾北部の霧島市小浜海岸の魚類相. Nature of Kagoshima, 47: 373–379. [URL](#)
- 中村潤平・樋之口蓉子・本村浩之. 2019. 水抜き調査によって明らかになった鹿児島県霧島市国分広瀬の小村新田干拓潮遊池の魚類相. Nature of Kagoshima, 46: 225–230. [URL](#)
- Randall, J. E. 1995. Coastal fishes of Oman. Crawford House Publishing, Bathurst. xvi + 439 pp.
- Rangel, C. A., J. L. Gasparini and R. Z. P. Guimaraes. 2004. A new species of combtooth blenny *Scartella* Jordan, 1886 (Teleostei: Blenniidae) from Trindade Island, Brazil. Aqua, Journal of Ichthyology and Aquatic Biology, 8: 89–96.
- Rangel, C. A. and L. F. Mendes. 2009. Review of blennioid fishes from Fernando de Noronha Archipelago, Brazil, with description of a new species of *Scartella* (Teleostei: Blenniidae). Zootaxa, 2006: 51–61.
- Sadovy, Y. and A. S. Cornish. 2000. Reef fishes of Hong Kong. Hong Kong University, Hong Kong. xii + 321 pp.
- Shen, S.-C., T.-H. Yang and J. J. Lin. 1986. A review of the blennioid fishes in the waters around Taiwan and its adjacent islands. Taiwan Museum Special Publications Series, 5: 1–74.
- 内田 肇・須田有輔・町井紀之. 1998. 土井ヶ浜海岸の碎波帯に出現する魚類. 水産大学校研究報告, 46: 163–173. [URL](#)
- Wood, A. D., L. Brouwer, P. D. Cowley and T. D. Harrison. 2000. An updated check list of the ichthyofaunal species assemblage of the Tsitsikamma National Park, South Africa. Koedoe, 43: 83–95. [URL](#)
- 吉野哲夫. 1984. タテガミギンポ, p. 283, pl. 265-C. 益田 一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫 (編) 日本産魚類大図鑑. 東海大学出版会, 東京.
- Zajonz, U., E. Lavergne, S. V. Bogorodsky, F. N. Saeed, M. S. Aided and F. Krupp. 2019. Coastal fish diversity of the Socotra Archipelago, Yemen. Zootaxa, 4636: 1–108. [URL](#)